氷島

萩原朔太郎

青空文庫

自序

近代の抒情詩、概ね皆感覺に偏重し、イマヂズムに走り、或は理智の意匠的構成に耽つて、詩的情熱の單一な原質的表現を忘れて居る。却つてこの種の詩は、今日の批判で素朴的なものに考へられ、詩の原始形態の部に範疇づけられて居る。しかしながら思ふに、多彩の極致は單色であり、複雜の極致は素朴であり、そしてあらゆる進化した技巧の極致は、無技巧の自然的單一に歸するのである。藝術としての詩が、すべての歴史的發展の最後に於て、究極するところのイデアは、所詮ポエヂイの最も單純なる原質的實體、即ち詩的情熱の素朴純粹なる詠嘆に存するのである。（この意味に於て、著者は日本の和歌や俳句を、近代詩のイデアする未來的形態だと考へて居る。）

かうした理窟はとにかく、この詩集に收めた少數の詩は、すくなくとも著者にとつては、純粹にパツショネートな詠嘆詩であり、詩的情熱の最も純一の興奮だけを、素朴直截に表出した。換言すれば著者は、すべての藝術的意圖と藝術的野心を廢棄し、單に「心のまま」に、自然の感動に任せて書いたのである。したがつて著者は、決して自ら、この詩集の價値を世に問はうと思つて居ない。この詩集の正しい批判は、おそらく藝術品であるよりも、著者の實生活の記

録であり、切實に書かれた心の日記であるのだらう。

著者の過去の生活は、北海の極地を漂ひ流れる、侘しい氷山の生活だつた。その氷山の嶋嶋から、幻像（まぼろし）のやうなオーロラを見て、著者はあこがれ、惱み、悦び、悲しみ、且つ自ら怒りつつ、空しく潮流のままに漂泊して來た。著者は「永遠の漂泊者」であり、何所に宿るべき家郷も持たない。著者の心の上には、常に極地の侘しい曇天があり、魂を切り裂く氷島の風が鳴り叫んで居る。さうした痛ましい人生と、その實生活の日記とを、著者はすべて此等の詩篇に書いたのである。讀者よろしく、巻尾の小解と參照して讀まれたい。

因に、集中の「郷土望景詩」五篇は、中「監獄裏の林」の一篇を除く外、すべて既刊の集に發表した舊作である。此所にそれを再録したのは、詩のスタイルを同一にし、且つ内容に於ても、本書の詩篇と一脈の通ずる精神があるからである。換言すればこの詩集は、或る意味に於て「郷土望景詩」の續篇であるかも知れない。著者は東京に住んで居ながら、故郷上州の平野の空を、いつも心の上に感じ、烈しく詩情を紋べるのである。それ故にこそ、すべての詩篇は「朗吟」であり、朗吟の情感で歌はれて居る。讀者は聲に出して讀むべきであり、決して默讀すべきではない。これは「歌ふための詩（うた）」なのである。

昭和九年二月

著者

我が心また新しく泣かんとす
冬日暮れぬ思ひ起せや岩に牡蠣

漂泊者の歌

日は斷崖の上に登り
憂ひは陸橋の下を低く歩めり。
無限に遠き空の彼方
續ける鐵路の柵の背後(うしろ)に
一つの寂しき影は漂ふ。

ああ汝　漂泊者！
過去より來りて未來を過ぎ
久遠の郷愁を追ひ行くもの。
いかなれば跫爾として
時計の如くに憂ひ歩むぞ。
石もて蛇を殺すごとく
一つの輪　を斷絶して

意志なき寂寥を蹈み切れかし。

ああ　悪魔よりも孤獨にして
汝は氷霜の冬に耐へたるかな！
かつて何物をも信ずることなく
汝の信ずるところに憤怒を知れり。
かつて欲情の否定を知らず
汝の欲情するものを彈劾せり。
いかなればまた愁ひ疲れて
やさしく抱かれ接吻（きす）する者の家に歸らん。
かつて何物をも汝は愛せず
何物もまたかつて汝を愛せざるべし。

ああ汝　寂寥の人
悲しき落日の坂を登りて
意志なき斷崖を漂泊（さまよ）ひ行けど
いづこに家郷はあらざるべし。

汝の家郷は有らざるべし！

遊園地（ゆうえんち）にて

遊園地（ゆうえんち）の午後なりき
樂隊は空に轟き
　轉木馬の目まぐるしく
艶めく紅（べに）のごむ風船
群集の上を飛び行けり。

今日の日曜を此所に來りて
われら模擬飛行機の座席に乘れど
側へに思惟するものは寂しきなり。
なになれば君が瞳孔（ひとみ）に
やさしき憂愁をたたへ給ふか。
座席に肩を寄りそひて

接吻(きす)するみ手を借したまへや。

見よこの飛翔する空の向うに
一つの地平は高く揚り　また傾き　低く沈み行かんとす。
暮春に迫る落日の前
われら既にこれを見たり
いかんぞ人生を展開せざらむ。
今日の果敢なき憂愁を捨て
飛べよかし！　飛べよかし！

明るき四月の外光の中
嬉嬉たる群集の中に混りて
ふたり模擬飛行機の座席に乗れど
君の圓舞曲(わるつ)は遠くして
側へに思惟するものは寂しきなり。

乃木坂倶樂部

十二月また來れり。
なんぞこの冬の寒きや。
去年はアパートの五階に住み
荒漠たる洋室の中
壁に寢臺（べつと）を寄せてさびしく眠れり。
わが思惟するものは何ぞや
すでに人生の虚妄に疲れて
今も尚家畜の如くに飢ゑたるかな。
我れは何物をも喪失せず
また一切を失ひ盡せり。
いかなれば追はるる如く
歳暮の忙がしき街を憂ひ迷ひて
晝もなほ酒場の椅子に醉はむとするぞ。
虚空を翔け行く鳥の如く
情緒もまた久しき過去に消え去るべし。

十二月また來れり
なんぞこの冬の寒きや。
訪ふものは扉(どあ)を叩(の)つくし
われの懶惰を見て憐れみ去れども
石炭もなく煖爐もなく
白堊の荒漠たる洋室の中
我れひとり寢臺(べっど)に醒めて
白晝(ひる)もなほ熊の如くに眠れるなり。

殺せかし！　殺せかし！

いかなればかくも氣高く
優しく　麗はしく　香(かぐ)はしく
すべてを越えて君のみが匂ひたまふぞ。
我れは醜き獸(けもの)にして

いかでみ情の數にも足らむ。
もとより我れは奴隷なり　家畜なり
君がみ足の下に腹這ひ　犬の如くに仕へまつらむ。
願くは我れを蹈みつけ
侮辱し
唾(つば)を吐きかけ
また床の上に蹴り
きびしく苛責し
ああ　遂に——
わが息の根の止まる時までも。

我れはもとより家畜なり　奴隷なり
悲しき忍從に耐へむより
はや君の鞭の手をあげ殺せかし。
打ち殺せかし！　打ち殺せかし！

歸郷

昭和四年の冬、妻と離別し二兒を抱へて故郷に歸る

わが故郷に歸れる日
汽車は烈風の中を突き行けり。
ひとり車窓に目醒むれば
汽笛は闇に吠え叫び
火焔（ほのほ）は平野を明るくせり。
まだ上州の山は見えずや。
夜汽車の仄暗き車燈の影に
母なき子供等は眠り泣き
ひそかに皆わが憂愁を探（さぐ）れるなり。
嗚呼また都を逃れ來て

何所(いづこ)の家郷に行かむとするぞ。
過去は寂寥の谷に連なり
未來は絶望の岸に向へり。
砂礫(されき)のごとき人生かな！
われ既に勇氣おとろへ
暗憺として長(とこし)なへに生きるに倦みたり。
いかんぞ故郷に獨り歸り
さびしくまた利根川の岸に立たんや。
汽車は曠野を走り行き
自然の荒寥たる意志の彼岸に
人の憤怒(いきどほり)を烈しくせり。

波宜亭

少年の日は物に感ぜしや
われは波宜(はぎ)亭の二階によりて

かなしき情感の思ひにしづめり。
その亭の庭にも草木茂み
風ふき渡りてばうばうたれども
かのふるき待たれびとありやなしや。
いにしへの日には鉛筆もて
欄干（おばしま）にさへ記せし名なり。

――郷土望景詩――

家庭

古き家の中に坐りて
互に默（もだ）しつつ語り合へり。
仇敵に非ず
債鬼に非ず
「見よ！　われは汝の妻
死ぬるとも尚離れざるべし。」

眼(め)は意地悪しく　復讐に燃え　憎憎しげに刺し貫ぬく。
古き家の中に坐りて
脱るべき術(すべ)もあらじかし。

珈琲店　醉月

坂を登らんとして渇きに耐へず
蹌踉として醉月の扉(どあ)を開けば
狼藉たる店の中より
破れしレコードは鳴り響き
場末の煤ぼけたる電氣の影に
貧しき酒瓶の列を立てたり。
ああ　この暗愁も久しいかな！
我れまさに年老いて家郷なく
妻子離散して孤獨なり
いかんぞまた漂泊の悔を知らむ。

女等群がりて卓を圍み
我れの醉態を見て憫みしが
たちまち罵りて財布を奪ひ
殘りなく錢(ぜに)を數へて盜み去れり。

新年

新年來り
門松は白く光れり。
道路みな霜に凍りて
冬の凜烈たる寒氣の中
地球はその週曆を新たにするか。
われは尚悔いて恨みず
百度(たび)もまた昨日の彈劾を新たにせむ。
いかなれば虛無の時空に
新しき辨證の非有を知らんや。

わが感情は飢ゑて叫び
わが生活は荒寥たる山野に住めり。
いかんぞ暦數の回歸を知らむ
見よ！　人生は過失なり。
今日の思惟するものを斷絶して
百度(たび)もなほ昨日の悔恨を新たにせん。

晩秋

汽車は高架を走り行き
思ひは陽(ひ)ざしの影をさまよふ。
靜かに心を顧みて
滿たさるなきに驚けり。
巷(ちまた)に秋の夕日散り
鋪道に車馬は行き交へども
わが人生は有りや無しや。

煤煙くもる裏街の
貧しき家の窓にさへ
斑黄葵（むらきあふひ）の花は咲きたり。

――朗吟のために――

品川沖觀艦式

低き灰色の空の下に
軍艦の列は横はれり。
暗憺として錨をおろし
みな重砲の城の如く
無言に沈鬱して見ゆるかな。

曇天暗く
埠頭に觀衆の群も散りたり。
しだいに暮れゆく海波の上

既に分列の任務を終へて
艦(ふね)等みな歸港の情に渇けるなり。

冬の日沖に荒れむとして
浪は舷側に凍り泣き
錆は鐵板に食ひつけども
軍艦の列は動かんとせず
蒼茫たる海洋の上
彼等の叫び、渇き、熱意するものを強く持せり。

火

赤く燃える火を見たり
獸類(けもの)の如く
汝は沈默して言はざるかな。

夕べの靜かなる都會の空に
炎は美しく燃え出づる
たちまち流れはひろがり行き
瞬時に一切を亡ぼし盡せり。
資産も、工場も、大建築も
希望も、榮譽も、富貴も、野心も
すべての一切を燒き盡せり。

火よ
いかなれば獸類(けもの)の如く
汝は沈默して言はざるかな。
さびしき憂愁に閉されつつ
かくも靜かなる薄暮の空に
汝は熱情を思ひ盡せり。

地下鐵道(さぶうえい)にて

ひとり來りて地下鐵道(さぶうえい)の
青き歩廊(ほうむ)をさまよひつ
君待ちかねて悲しめど
君が夢には無きものを
なに幻影(まぼろし)の後尾燈
空洞(うつろ)に暗きトンネルの
壁に映りて消え行けり。
壁に映りて過ぎ行けり。

「なに幻影(まぼろし)の後尾燈」「なに幻影(まぼろし)の戀人を」に通ず。掛ケ詞。

小出新道

ここに道路の新開せるは
直として市街に通ずるならん。
われこの新道の交路に立てど
さびしき四方(よも)の地平をきはめず
暗鬱なる日かな
天日家竝の軒に低くして
林の雑木まばらに伐られたり。
いかんぞ　いかんぞ思惟をかへさん
われの叛きて行かざる道に
新しき樹木みな伐られたり。

――郷土望景詩――

告別

動物園にて

汽車は出發せんと欲し
汽罐（かま）に石炭は積まれたり。
いま遠き信號燈（しんごうとう）と鐵路の向うへ
汽車は國境を越え行かんとす。
人のいかなる愛着もて
かくも機關車の火力されたる
烈しき熱情をなだめ得んや。
驛路に見送る人人よ
悲しみの底に齒がみしつつ
告別の傷みに破る勿れ。
汽車は出發せんと欲して
すさまじく蒸氣を噴き出し
裂けたる如くに吠え叫び
汽笛を鳴らし吹き鳴らせり。

灼きつく如く寂しさ迫り
ひとり来りて園内の木立を行けば
枯葉みな地に落ち
猛獣は檻の中に憂ひ眠れり。
彼等みな忍従して
人の投げあたへる肉を食らひ
本能の蒼き瞳孔（ひとみ）に
鐵鎖のつながれたる惱みをたへたり。
暗鬱なる日かな！
わがこの園内に來れることは
彼等の動物を見るに非ず
われは心の檻に閉ぢられたる
飢餓の苦しみを忍び怒れり。
百たびも牙を鳴らして
われの欲情するものを噛みつきつつ
さびしき復讐を戰ひしかな！

いま秋の日は暮れ行かむとし
風は人氣なき小徑に散らばひ吹けど
ああ我れは尚鳥の如く
無限の寂寥をも飛ばざるべし。

中學の校庭

われの中學にありたる日は
艶めく情熱になやみたり。
怒りて書物を投げすて
ひとり校庭の草に寢ころび居しが
なにものの哀傷ぞ
はるかに彼(か)の青きを飛び去り
天日直射して　熱く帽子の庇(ひさし)に照りぬ。

――鄕土望景詩――

國定忠治の墓

わがこの村に來りし時
上州の蠶すでに終りて
農家みな冬の閾(しきみ)を閉したり。
太陽は埃に暗く
悽而(せいじ)たる竹藪の影
人生の貧しき慘苦を感ずるなり。
見よ　此處に無用の石
路傍の笹の風に吹かれて
無賴(ぶらい)の眠りたる墓は立てり。

ああ我れ故郷に低徊して
此所に思へることは寂しきかな。
久遠に輪　　を斷絶するも
ああかの荒寥たる平野の中

日月我れを投げうつて去り
意志するものを亡び盡せり。
いかんぞ殘生を新たにするも
冬の蕭條たる墓石の下に
汝はその認識をも無用とせむ。

――上州國定村にて――

廣瀬川

廣瀬川白く流れたり
時されば皆幻想は消え行かむ。
われの生涯(らいふ)を釣らんとして
過去の日川邊に糸をたれしが
ああかの幸福は遠きにすぎさり
小さき魚(ちひ)は瞳(め)にもとまらず。

――鄕土望景詩――

虎

虎なり
曠茫として巨像の如く
百貨店上屋階の檻に眠れど
汝はもと機械に非ず
牙歯もて肉を食ひ裂くとも
いかんぞ人間の物理を知らむ。
見よ　穹窿に煤煙ながれ
工場區街の屋根屋根より
悲しき汽笛は響き渡る。
虎なり
虎なり

午後なり

廣告風船(ばるうむ)は高く揚りて
薄暮に迫る都會の空
高層建築の上に遠く坐りて
汝は旗の如くに飢ゑたるかな。
杳として眺望すれば
街路を這ひ行く蛆蟲ども
生きたる食餌を暗鬱にせり。

虎なり
昇降機械(えれべえたあ)の往復する
東京市中繁華の屋根に
琥珀の斑(まだら)なる毛皮をきて
曠野の如くに寂しむもの。
虎なり！
ああすべて汝の殘像
虚空のむなしき全景たり。

——銀座松坂屋の屋上にて——

無用の書物

蒼白の人
路上に書物を賣れるを見たり。
肋骨(あばら)みな瘠せ
軍鷄(しやも)の如くに叫べるを聽く。
われはもと無用の人
これはもと無用の書物
一錢にて人に賣るべし。
冬近き日に袷をきて
非有の窮乏は酢えはてたり。
いかなれば涙を流して
かくも黄色く古びたる紙頁(ページ)の上に
わが情熱するものを情熱しつつ
寂しき人生を語り續けん。

われの認識は空無にして
われの所有は無價値に盡きたり。
買ふものはこれを買ふべし。
路上に行人は散らばり去り
烈風は砂を巻けども
わが古き感情は叫びて止まず。
見よ！　これは無用の書物
一錢にて人に賣るべし。

虚無の鴉

我れはもと虚無の鴉
かの高き冬至の屋根に口を開けて
風見の如くに咆號せむ。
季節に認識ありやなしや
我れの持たざるものは一切なり。

我れの持たざるものは一切なり

我れの持たざるものは一切なり
いかんぞ窮乏を忍ばざらんや。
獨り橋を渡るも
灼きつく如く迫り
心みな非力の怒に狂はんとす。
ああ我れの持たざるものは一切なり
いかんぞ乞食の如く羞爾として
道路に落ちたるを乞ふべけんや。
捨てよ！　捨てよ！
汝の獲たるケチくさき名譽と希望と、
汝の獲たる汗くさき錢(ぜに)を握つて
勢ひ猛に走り行く自動車の後(あと)
枯れたる街樹の幹に叩きつけよ。

ああすべて卑穢なるもの
汝の非力なる人生を抹殺せよ。

監獄裏の林

監獄裏の林に入れば
囀鳥高きにしば鳴けり。
いかんぞ我れの思ふこと
ひとり叛きて歩める道を
寂しき友にも告げざらんや。
河原に冬の枯草もえ
重たき石を運ぶ囚人等
みな憎さげに我れを見て過ぎ行けり。
暗鬱なる思想かな
われの破れたる服を裂きすて
獣類（けもの）のごとくに悲しまむ。

ああ季節に遅く
上州の空の烈風に寒きは何ぞや。
まばらに殘る林の中に
看守の居て
劍柄（つか）の低く鳴るを聽けり。

――鄉土望景詩――

昨日にまさる戀しさの

昨日にまさる戀しさの
湧きくる如く高まるを
忍びてこらへ何時までか
惱みに生くるものならむ。
もとより君はかぐはしく
阿艷（あで）に匂へる花なれば
わが世に一つ殘されし

生死の果の情熱の
戀さへそれと知らざらむ。
空しく君を望み見て
百たび胸を焦すより
死なば死ねかし感情の
かくも苦しき日の暮れを
鐵路の道に迷ひ來て
破れむまでに嘆くかな
破れむまでに嘆くかな。

――朗吟調小曲――

詩篇小解

漂泊者の歌（序詩）　斷崖に沿うて、陸橋の下を歩み行く人。そは我が永遠の姿。寂しき漂泊者の影なり。巻頭に掲げて序詩となす。

歸郷　昭和四年。妻は二兒を殘して家を去り、杳として行方を知らず。我れ獨り後に殘り、蹌踉として父の居る上州の故郷に歸る。上野發七時十分、小山行高崎　り。夜汽車の暗爾たる車燈の影に、長女は疲れて眠り、次女は醒めて夢に歔欷す。聲最も悲しく、わが心すべて斷腸せり。既にして家に歸れば、父の病とみに重く、萬景悉く蕭條たり。

乃木坂倶樂部　乃木坂倶樂部は麻布一聯隊の附近、坂を登る崖上にあり。我れ非情の妻と別れてより、二兒を家郷の母に托し、暫くこのアパートメントに寓す。連日荒妄し、懶惰最も極めたり。白晝（ひる）はベツトに寢ねて寒さに悲しみ、夜は遲く起きて徘徊す。稀れに訪ふ人あれども應へず、扉（どあ）に固く鍵を閉せり。我が知れる悲しき職業の女等、ひそかに我が孤窶を憫む如く、時に來りて部屋を掃除し、漸く衣類を整頓せり。一日辻潤來り、わが生活の荒蕪を見て唖然と

せしが、忽ち顧みて大に笑ひ、共に酒を汲んで長嘆す。

品川沖觀艦式　昭和四年一月、品川沖に觀艦式を見る。時薄暮に迫り、分列の式既に終りて、觀衆は皆散りたれども、灰色の悲しき軍艦等、尚錨をおろして海上にあり。彼等みな軍務を終りて、歸港の情に渇ける如し。我れ既に生活して、長く既に疲れたれども、軍務の歸すべき港を知らず。暗憺として碇泊し、心みな錆びて牡蠣に食はれたり。いかんぞ風景を見て傷心せざらん。鬱然として怒に耐へず、遠く沖に向て叫び、我が意志の烈しき渇きに苦しめり。

珈琲店　醉月　醉月の如き珈琲店は、行くところの侘しき場末に實在すべし。我れの如き悲しき痴漢、老いて人生の家郷を知らず、醉うて巷路に徘徊するもの、何所にまた有りや無しや。坂を登らんと欲して、我が心は常に渇きに耐へざるなり。

新年　新年來り、新年去り、地球は百度　轉すれども、宇宙に新しきものあることなし。年年歳歳、我れは昨日の悔恨を繰返して、しかも自ら悔恨せず。よし人生は過失なるも、我が欲情するものは過失に非ず。いかんぞ一切を彈劾するも、昨日の悔恨を悔恨せん。新年來り、百度過失を新たにするも、我れは尚悲壯に耐へ、決して、決して、悔いざるべし。昭和七年一月一日。これを新しき日記に書す。

火　我が心の求めるものは、常に靜かなる情緒なり。かくも優しく、美しく、靜かに、靜かに、燃えあがり、音樂の如く流れひろがり、意志の烈しき惱みを知るもの。火よ！　汝の優しき音樂もて、我れの夕べの臥床の中に、眠りの戀歌を唄へよかし。我れの求めるものは情緒なり。

國定忠治の墓　昭和五年の冬、父の病を看護して故郷にあり。人事みな落魄して、心烈しき飢餓に耐へず。ひそかに家を脱して自轉車に乘り、烈風の砂礫を突いて國定村に至る。忠治の墓は、荒寥たる寒村の路傍にあり。一塊の土塚、暗き竹藪の影にふるへて、冬の日の天日暗く、無頼の悲しき生涯を忍ぶに耐へたり。我れ此所を低徊して、始めて更らに上州の蕭殺たる自然を知れり。路傍に倨して詩を作る。

監獄裏の林　前橋監獄は、利根川に望む崖上にあり。赤き煉瓦の長壘、夢の如くに遠く連なり、地平に落日の影を曳きたり。中央に望樓ありて、悲しく四方(よも)を眺望しつつ、常に囚人の監視に具ふ。背後(うしろ)に楢の林を負ひ、周圍みな平野の麥畠に圍まれたり。我れ少年の日は、常に麥笛を鳴らして此所を過ぎ、長き煉瓦の塀を　りて、果なき憂愁にさびしみしが、崖を下りて河原に立てば、冬枯れの木立の中に、悲しき懲役の人人、看守に引かれて石を運び、利根川の

淺き川瀬を速くせり。

　戀愛詩四篇　「遊園地にて」「殺せかし！　殺せかし！」「地下鐵道にて」「昨日にまさる戀しさの」等凡て昭和五――七年の作。今は既に破き棄てたる、日記の果敢なきエピソードなり。我れの如き極地の人、氷島の上に獨り住み居て、そもそも何の愛戀ぞや。過去は恥多く悔多し。これもまた北極の長夜に見たる、侘しき極光（オーロラ）の幻燈なるべし。

　鄕土望景詩（再録）　鄕土望景詩五篇、中「監獄裏の林」を除き、すべて前の詩集より再録す。「波宜亭」「小出新道」「廣瀬川」等、皆我が故鄕上州前橋市にあり。我れ少年の日より、常にその河邊を逍遙し、その街路を行き、その小旗亭の庭に遊べり。蒼茫として歲月過ぎ、廣瀬川今も白く流れたれども、わが生の無爲を救ふべからず。今はた無恥の詩集を刊して、再度世の笑ひを招かんとす。稿して此所に筆を終り、いかんぞ自ら懺死せざらむ。

青空文庫情報

底本：「萩原朔太郎全集　第二巻」筑摩書房
　1976（昭和51）年3月25日初版発行
底本の親本：「氷島」第一書房
　1934（昭和9）年6月1日発行
初出：漂泊者の歌「改造　第十三巻第六號」
　1931（昭和6）年6月号
　遊園地《るなぱあく》にて「若草　第七巻第七號」
　1931（昭和6）年7月号
　乃木坂倶樂部「詩・現實　第四册」
　1931（昭和6）年3月
　殺せかし！　殺せかし！「蝋人形　第二巻第十二號」
　1931（昭和6）年12月号
　歸郷「詩・現實　第四册」
　1931（昭和6）年3月
家庭「詩・現實　第四册」

1931（昭和6）年3月
珈琲店　醉月「詩・現實　第四册」
1931（昭和6）年3月
新年「詩・現實　第四册」
1931（昭和6）年3月
晩秋「都新聞」
1931（昭和6）年1月22日
品川沖觀艦式「詩・現實　第四册」
1931（昭和6）年3月
火「ニヒル　創刊號」
1930（昭和5）年2月号
小出新道「日本詩人　第五巻第六號」
1925（大正14）年6月号
告別「ニヒル　創刊號」
1930（昭和5）年2月号
動物園にて「ニヒル　創刊號」
1930（昭和5）年2月号

中學の校庭「薔薇」
1923（大正12）年1月号
國定忠治の墓「生理　※［#ローマ数字1、1-13-21］」
1933（昭和8）年6月
虎「生理　※［#ローマ数字1、1-13-21］」
1933（昭和8）年6月
無用の書物「文藝春秋　第八巻第一號」
1930（昭和5）年1月号
虚無の鴉「文藝春秋　第五巻第三號」
1927（昭和2）年3月号
我れの持たざるものは一切なり「文藝春秋　第五巻第三號」
1927（昭和2）年3月号
監獄裏の林「日本詩人　第六巻第四號」
1926（大正15）年4月号
昨日にまさる戀しさの「古東多万　第二年第一號」
1932（昭和7）年1月号

※「遊園地《るなぱあく》にて」の初出時の表題は「遊園地にて」です。

※「乃木坂倶樂部」の初出時の表題は「乃木坂倶樂部アパートメント」です。
※「殺せかし！　殺せかし！」の初出時の表題は「殺せかし!殺せかし!」です。
※「珈琲店　醉月」の初出時の表題は「珈琲店醉月」です。
※「晩秋」の初出時の表題は「斷章」です。
※「虎」の初出時の表題は「屋上の虎」です。
※「虚無の鴉」の初出時の表題は「否定せよツ※［#感嘆符三つ、99-下-2］」です。
入力：kompass
校正：今井忠夫
2003年12月15日作成
2018年12月3日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

氷島

萩原朔太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/